

「旧敵国の花嫁」、豪移住で苦難

第2次大戦直後、日本に進駐した連合国軍のオーストラリア兵士と結婚した日本人女性約650人が豪州に渡った。白人が優遇された当時の豪社会で、旧敵国から来た花嫁には冷たい視線が注がれ、日本人であることを封印して暮らす苦難を強いられた人もいた。

白人優遇時代に日本色封印

◇名前も英語に

日系人団体「ニッケイ・オーストラリア」のエリシャ・レイ代表（38）の祖母、昭子・カーカムさん（旧姓平野）は1953年に豪州に移住した花嫁の一人だ。

トの仕事を得て、そこで18歳上の豪兵士グレン・カーカムさんと出会って結婚。夫の任務終了に伴い豪州へ移った。

英国の植民地から連邦国家となった豪州は当時、有色人種の移民を制限する「白豪主義」を国策とし、日本人を「エネミー・エイリアン（旧敵国の異人）」と位置付けていた。「豪州人になりきる」と決意した昭子さん

は、便宜的に「エルサ」を名乗り、8年かけて帰化した。

◇「解放」後は通訳

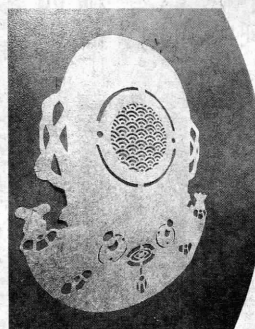
夫妻は4人の子供に恵まれ、東部プリズベンや首都キャンベラなどで暮らした。だが、42年の旧日本軍によるダーウィン爆撃をはじめ交戦の記憶が生々しく残る時代、日豪の結婚に反対や不快感を示す人も少なくなかった。1人の娘（レイさんの母）



昭子・カーカムさん（左）と夫のグレンさんの結婚当初の写真豪プリズベン（時事）

は、容姿に関していじめに遭ったという。

昭子さんは豪社会に溶け込むため日本語を一切話さず、料理も英国式を貫いた。グレンさん



真珠養殖の潜水ヘルメットをかたどったエリシャ・レイさんの切り絵「豪タウンズビル」（時事）

し、家族を守った。一方、周囲の支えを得られず孤立し、自ら命を絶った花嫁もいたという。子育てが一段落した昭子さんはタイピストとして、ひっそりと日本語の教科書作成に携わった。73年、豪政府が白豪主義を撤廃し、多文化を認める路線へ転換すると、昭子さんは日本色を消す20年間の抑圧からようやく「解放」された。その後、東部ゴールドコーストで観光通訳士を務め、日豪交流に尽くし

多文化転換で交流に尽くす

◇白豪主義

オーストラリアでかつて取られた、白人を優遇し有色人種の移民受け入れを制限する政策。1850年代の金鉱発見後、中国人が急激に流入したことへの反動から始まり、豪連邦が発足した1901年に移民制限法が制定された。

日本人移民は明治期から第2次大戦で敵対するまで、製糖や真珠養殖の安価な労働力として一定数認められた。戦後にアジアとの交易が増えたことや人種差別への内外の批判を踏まえ、73年に移民法が改正され、白豪主義は終わりを迎えた。（時事）



昭子・カーカムさんの書道作品の横に立つ孫のエリシャ・レイさん＝豪プリズベン（時事）

